三郷巷談

折口信夫

青空文庫

一　もおずしやうじん

泉北郡百舌鳥村大字百舌鳥では、色々よそ村と違つた風習を伝へてゐた。其が今では、だん〳〵平凡化して来た。此処にいふもおずしやうじんの如きは、殊に名高いものになつて居た。

此村には万代八幡宮といふ、堺大阪あたりに聞えた宮がある。其氏子は、正月三个日は、たとひどんな事があつても、肉食をせないで、物忌みにこもつた様に、慎んでゐなければならぬので、堺あたり（堺市へ廿町）へ奉公に出てゐるものは、三个日は、必在処に帰つて、ひきこもつて精進をする。此村から出る奉公人は、目見えの際、きつと正月三个日藪入りの事を条件として、もち出す事になつてゐた。処が、村へ戻れぬ様な事でもあると、主家にゐて、精進を厳かに保つてゐる。労働者なんかで、遠方へ出稼ぎに行つてるものも、やはり、所謂其もおずしやうじんを実行したものだ。でなければ、冥罰によつて、かつたい（癩病）になる、といふ信仰を持つてゐたのである。

もおずしやうじんは、三个日は無論厳かに実行するのだが、其数日前から、既に、そろ〳〵始められるので、年内に煤掃きをすまして、餅を搗くと、すつかり精進に入る。来客があつても、もおずしやうじんのなかまうちである村の人は、なるべくは、座敷にも上げまいとする。縁台を庭に持出して、其に客を居させて、大抵の応待は、其処ですましてしまふ。

三个日の間は、村人以外の者と、一つ火で煮炊きしたものを食はない。それから、此間は、男

女のかたらひは絶対に禁ぜられてゐるので、もし犯す事もあつてはといふので、一家みな、一つ処にあつまつて寝る。そして、三日の夜に入つて、はじめて精進を落す事になつてゐる。家によると、よそ村から年賀に来る客の為に、酒肴を用意して置いて、家族は一切別室に引籠つてゐて、客に会はない。そして、客が勝手に、酒肴を喰べ酔うて帰るに任せてあつた、とも聞いてゐる。近年は徴兵制度の為に、軍隊に居る者が三个日の間に肉食をしても、別に異状のないことやら、どだい、だん〳〵不信者の増した為に、厳重には行はれない様になつたさうである。

此風習の起原は、両様に説明せられてゐる。一つは、此村はかつたいが非常に多かつたのを、八幡様が救つて下さつた。其時の誓によつて、正月三个日は精進潔斎をするのだといふ。今一つは、ある時、弘法大師が此村に来られた処が、村は非常に水が悪かつたので、水をよくして下さつた。其時村人は、水を清くして貰ふ代りに、正月三个日は精進潔斎をいたしますと誓つた。其時、証拠人として立たれたのが、万代八幡様であつたとも伝へて居る。

二　あはしま

どこともに大同小異の話を伝へてゐるあはしま伝説を、とりたてゝ言ふほどの事もあるまいが、根源の淡島明神に近いだけに、紀州から大阪へかけて拡つてゐる形式を書く。

加太（紀州）の淡島明神は女体で、住吉の明神の奥様でおありなされた。処が、白血長血（シラチナガチ）（しらちながしなどゝもいふ）をわづらはれたので、住吉明神は穢れを嫌うて表門の扉を一枚はづ

して、淡島明神と神楽太鼓とを其に乗せて、前の海に流された。其扉の船が、加太に漂着したので、其女神を淡島明神と崇め奉つたのだ。其で、住吉の社では今におき、表門の扉の片方と神楽太鼓とがないと言ふ。此は淡島と蛭子とを一つにした様に思はれる。しかし或は、月読命と須佐之男命と形式に相通ずる所がある様に、淡島・蛭子が素質は一つである事を、暗示するものかも知れない。

処で、此処に、も一つおもしろい事がある。其は、住吉につゞく堺の朝日明神の社に就ても、同様形式を伝へてゐる事である。白血長血、扉の件は同じで、海に放たれたのを朝日明神様であるといふ。神楽太鼓の件は、此方の話にはあるかないか断言しかねる。七月三十日（昔は大祓の日）には、堺の宿院の御旅所へ住吉の神輿の渡御がある。其をり、神輿が堺の町に這入ると、本道の紀州海道は行かないで、わざ〳〵海岸を迂回して、御旅所に達する。此は、神明の社が紀州海道に面してゐる（宿院行宮も同様海道に面し、神明社の南十町ほどに在る）ので、神明様の怨まれるのを恐れて、避けられるのだと言ふ。此日、朝日明神の社では、住吉の神輿が新大和川を渡つて、堺の町に這入られるから、宿院に着かれるまで、太鼓をうちつゞけに打つ事になつてゐる。此は、神明様の嫉妬・怨恨の情を表象するものだと伝へる。

三　南ぬけの御名号（ナミヤウガウ）

木津には、七軒の旧家があつた。願泉寺門徒が、石山本願寺の為に死に身になつて、織田勢と戦つた功に依つて、各顕如上人から苗字を授けられたと伝へ、雲雀のやうに、空まで舞ひ上つ

て、物見をしたので雲雀（ヒバル）、上人紀州落ちの手引きをして、海への降り口を教へた処から折口（フリクチ）、其節、莚帆を前にして、匿して遁げたのが莚帆（ミシロボ）だなどゝ云ふ話を聞かされてゐた。

其中の雲雀氏は、代々の通称が五郎左衛門で、其苗字の外に、六字の名号を布に書いたのを頂戴して、永く持ち伝へ、家に法事のある毎に、人に拝ませてゐたが、此御名号には唯「無阿弥陀仏」の五字だけしか無かつた。何代目かの五郎左衛門が、放蕩から此宝物を質屋の庫に預け、後に此を受出して見ると、南の一字が消えて了うてゐたので「南（ナ）ぬけの御名号（ミヤウガウ）」と称して、恐しく神聖な物と考へられて居た。近年はどういふ折にも見せぬ様になつた。

四　算勘の名人

此は何処からどうして来た人とも、今以て判然せぬが、安政の大地震の時の事である。大阪では地震と共に、小さな海嘯（ツナミ）があつて、木津川口の泊り船は半里以上も、狭い水路を上手へ、難波村深里（フカリ）の加賀の屋敷前まで、押し流されて来た時の話である。木津の唯泉寺（ユキセンジ）（大谷派）の本堂が曲つて、棟の上で一尺五寸も傾いた。其節誰かゞ十露盤（ソロバン）の名人と云ふ人を一人連れて来て、此を見せると、即坐に、此堂を真直ぐにしよう、と請合うた。さて、自分が堂の中で為事をしてゐる間は、一人も境内に居てはならぬ、と戒めて置いて、自分一人中に入り、門を鎖（シ）め、本堂の蔀（シトミ）までも下して、堂内に静坐し、十露盤を控へて、ぱち〳〵と数を詰（ツ）めて行つたさうだ。すると、段々、其が熟して来たと見えて、外から見てゐると、ぎい〳〵と音がして、棟も柱も真直ぐに起き直つた、と云ふ事である。現に、此を見て居つたといふ人が、何人か今も居る。

五　樽入れ・棒はな

木津では若い衆（ワカシュ）の団体たる若中（ワカナカ）の上に、兄若い衆（アニワカシュ）と云ふ者があつた。若中（ワカナカ）に居た時から人望があつた者が、若い衆の胆煎（キモイリ）をするので、其等の家が、年番に「宿」と称して、若い衆の集会所になつたものであつた。

此兄若（アニ）い衆は、すべて、若中を心の儘に左右し、随分威張つてゐた。祭りが近くなると、町々の「宿」の表には、四尺四方ぐらゐな四角の枠の中に、一本隔てを入れたのに、大きな御神燈を二張括（ふたはり）り附けて、軒に懸けてゐた。だいがくに出る揃への衣裳の浴衣地は、此処で分けてくれた事を覚えてゐる。此処は若中の策源地なので、余程こはもてのしたものであつた。

ばうたの哀訴も、此処へ提出せられる事が多かつた。町内の豪家に婚礼があると、此処に集る若い衆が、おめでたのある家の表へ空樽を積み込む。さうして、一挺幾らづゝかの勘定で、祝儀の金を乞ふ。其が憎まれてゐる家である時は、空樽の山を築き、驚くべき入費を掛けさせて、痛快とする。

若しまた、若中或は兄若い衆の怨を買うた節には大変で、更に、ばゞかけと称する野臭の漲つた挙に出る。其は、肥桶（コエタゴ）を宴席に担ぎ込んで、畳の上にぶちまけるので、其汚物の中には蛙・蟇などが数多く為込んであつて、其がぴよん〳〵跳ね廻つて、婚礼の席をめちや〳〵にする。

十四五年前、木津から半里（ハンミチ）ばかり隔たつた津守新田（ツモリシンデン）の某家から、他村へ輿入れの夜、嫁御寮を始め一同、十三間堀（ジフサンゲンボリ）といふ川を下つて了うた処が、土橋の上に隠れてゐた津守の若い衆が、其

船目掛けて、肥桶をぶちまけたので、急に、婚礼の日取りを換へた、と云ふ話もある。若中の権威は、啻に婚礼の晩に発揮するばかりではなかつた。祭りの際には、兼ねて憎んでゐる家に、棒はなといふ事をする。此は、だいがくの舁き棒を其家の戸なり壁なりに撞き当てる方法で、何しろ恐しい重量を棒鼻に集中して打ち当てるのだから、堪つたものではなかつたさうである。

六　執念の鬼灯

「五大力恋緘」に哀れな物語りを伝へた、曾根崎新地の菊野の殺された茶屋は、今年五十六になる私の母が、子供の頃までは残つて居たさうだ。芝居で見て知るよりも以前から、既に、私等は此話を聞いてゐた。其は曾祖母から口移しの話で、菊野が鬼灯を含んで鳴して居る処へ、源五兵衛（仮名）が来て、斬り殺したと云ふ事で、其執念が残つて、其茶屋の縁の下には、今でも鬼灯が生えるといふ物語りを、母が其まゝ、私等に聞かせた。子供の時分は、北の新地へさへ行けば、何時でも、菊野のかたみの鬼灯が見られるものと信じて居た。

七　六部殺し

熊野八鬼山の順礼殺しのからくり唄のまん中、島の内にも有つたのだとは、此頃始めて、教へ子梶喜一君から聞き知つた。而も、其家の名まで明らかに知れてゐるのは、何だか田園都市の匂ひを感ぜずには居られぬ。

南区三丁目の沖田といふ家は、今はすべて死に絶えて、唯一人残つた老婆が、天王寺辺で寂し

く御迎へを待つてゐるといふ。御一新騒ぎの当時、此家へ一夜の宿りを求めた六部があつた。処が、其翌日、彼が立つて行く影も形も見た者が無いのに、其姿は其儘消えて了うた。其後、何処から得た資本ともなく、たんまりとした金が這入つた模様で、色々の事に手を出し、とん〳〵拍子で指折りの金持ちになつたが、どうも不思議だ、といふ取沙汰(トリサタ)の最中に、主人が死に、息子が死にして、殆ど枝も幹も残らぬ様に、亡びて了うた。長堀から鰻谷(ウナギダニ)へかけて、沖田の六部殺しと言うて、因果の恐しさを目前に見た様に噂した事であつた。

八　日向の炭焼き

難波(ナンバ)の土橋(ドバシ)（今の叶橋(カナフバシ)）の西詰に、丶丶といふ畳屋があつた。此家は古くから、日向に取引先があつたと見えて、土橋の下には、度々日向の炭船が著いてゐたさうである。其炭船が日向へ帰つた後では、きつと行方知れずになる子供が尠からずあつたといふ。此は、畳屋が子供を盗んで、日向へ炭焼きに遣るのだ、といふ評判であつた。其で、私等の子供の頃にも、どうかした折には、土橋の畳屋へ遣ると嚇されたものである。

九　しやかどん

大阪府三島郡佐位寺(サヰデラ)に「つの」とも「かど」とも訓む字と、其第三の訓(クン)とを用ゐて、家の名とした一家がある。其一門は、男女と言はず、一様に青黒い濁りを帯びた皮膚の色をしてゐるので、古くから釈迦どんと言うてゐる。唯の黒さでなく、異様な煤け方である。其家の持ち地であつて、今は他家の物となつたと言ふ、村の山地には、釈迦ケ池と言ふ池がある。

一〇　夙村

河内の夙村では、村をとりまく濠やうの池のある事は、郷土研究にも見えた。但、其池はすべて、への字なりになつて居るといふ。

一一　ゆんべ

昨晩と言ふ語をば冒頭に据ゑた唄を、二つ報告する。但、二つとも末を忘れた。可なりな老人に聞いても知らぬ。要点は頭の方にある様だから書く。

ゆんべ生れたくまちやんは、じより〳〵（月代）剃つて、髪結うて、そろばん橋を渡ろとて、蟹にちんぽ（きんたま）をはそまれて、あいたい、こいたい。権兵衛（ゴンベ）さん。此身を助けてくださんせ。……

ゆんべ吹いた風は大津へ聞えて、大津はおんま（御馬か）つちのこは槍持ち、能（ヨ）う槍持つて。……

前のは、川村氏の「さいごたかもり、はじめて東へ下るとて、蟹にきんたま挟まれて（郷土研究四の七）」に似て居り、後のは、南方氏の田辺へ聞えた、又は西の宮へ聞えたの唄（同一の二）と同じ趣きである。

一二　うしはきば

此は、美濃路から東方に亘つてゐると思はれる、馬捨て場と同じ意味の場処である。多くは池の堤や、村から入りこんだ小川の岸などで、大抵人の行かぬ場所にあつた。わりあひに神聖な

処と考へられてゐる様である。死んだ牛の皮を剥ぐ場処の意で、はきを清音に言ふ。河内辺に多い地名である。牛を剥ぎにはえたが来て、皮・肉などは貰うて帰るのださうである。馬を使ふ農家はないから、一村の為事に、馬といふ考へは這入つてゐないのである。

一三　名字

木津・難波には、本と言ふ字のつく姓がある。樽屋が樽本、下駄屋が桐本、材木屋が木元など、皆、其商品を此が資本だ、と言ふ積りで拵へたのである。此は木津に多い。

妙玄・法覚・法西・覚道など言ふのは、難波に沢山ある名字で、戸主が本願寺のおかみそりを頂く節、貰うた法名を、そのまゝつけたのである。その中、会所であつたのをもぢつて改正、商買の質をわけて竹貝（タケガイ）・からやと言ふ屋号を、唐谷（カラタニ）としたのなどは、秀逸の部である。旧来の通称の儘のは、茶珍（チャヂン）・徳珍（トクヂン）・鈍宝（ドンボオ）・道木（ドオキ）・綿帽子（ワタボオシ）・仕合（シヤワセ）・午造（ゴゾオ）・宝楽（ホオラク）・雷（カミナリ）・鳶（トビ）・鍋釜（ナベカマ）などいふ、思案に能はぬのもある。

南波屋（ナンバヤ）が南波、木津屋（ヤ）が木津谷（キヅタニ）になつたのは普通だが、摂津・丹波の山間十石から出て来て、屋号としたじゅっこくを名字にしてから、俄かに幾代か前に、十石米を貧乏人に施した善根者があつたので、十石で通ることになつたのだ、と由緒を唱へ出した家もある。皆恐らくは、親類会議や、役場の役人の意見を借りたのであらうが、妙な名字を持つた家の子どもは、大困りである。「茶珍ちやあ（茶）沸せ」「徳珍とっくりぶち破つた」「宝楽（炮烙）わったら元の土」などゝ、小学生仲間から、始終なぶられてゐた。

由緒を誇る雲雀（ヒバル）（「折口といふ名字」参照）も、一歩木津の地を出ると、気恥しいと見えて、中学へ行つた一人は、うんじゃくと音読をしてゐた。道木（ドオキ）の方も、重箱訓みを恥ぢて、みちきと言うてゐた。

一四　人なぶり

はげ八聯隊、横はげ（又、単に横）四聯隊。

はげ山鉄道（てつと）道、汽車すべる。

散文的な文句だが、音勢を揺ぶる様に強く謡うて、くやしがらせる。又みっちゃ面（あばた）には、

へんば（みっちゃの一名。南区船場の口合ひ）火事発（イ）て、みっちゃくちゃ（むちゃくちゃを綟る）に焼けた。

みっちゃを更に、みっちゃくちゃとも言ふのである。

みっちゃ〳〵、どみっちゃ。ひきずりみっちゃ引っぱった。ひっぱったら切れた。切れたら、つないだ。

へんばは少し下卑た言ひ方である。ひきずりみっちゃは、痘痕（アナ）の続いてゐる旁若無人なあばた面を言ふ。獰猛な顔つきは、子どもの憎悪を唆ると見えて「みっちゃ〳〵」の唄なども、其では慊（あきた）らぬか「ど、ど（又「どんど」）みっちゃ……」と憎さげに言ひかへる事もある。跛足（チンバ）を罵る時にも、同様「ちんば〳〵。どちんば」と謡ふ。

文句は確か、此ぎりの短いものであつた。其外かんち（か清音）めくらなどを嬲る文句も、あつた様だが忘れた。

下水道（スキド）にはまるとか、糞を踏むとか、泥を握るとかした時は「びゞんちよにさぁ（触（サハ））ろまい。石・金踏んどこ（〳〵で置かう）」又は「石・金持っとこ」と言ふ。びゞんちよは穢れた人と言ふ意。かう謡ひながら、石なり、釘なり、雪駄の裏金なりを、道ばたで拾うて持つ。びゞんちよと言はれた子は、やつきになつて、びゞんちよをうつさ（伝染）うとする。石・金を持たぬ子は、びゞんちよになつて了ふので、石・金を持つてゐる中は、穢れが移らぬのである。裏金のついた雪駄をはいた者は、どんな事があつても、びゞんちよの仲間入りはせぬ。人なぶりから、遊戯に近くなつてゐる。

遊んでゐて、泣くと「泣きみそきみそ」と言ふ。喧嘩に負けたり、虐められた子供の親がおこりに出ると、

子どもの喧嘩に親出すな。親があきれて、ぼゞ出すな。

人の顔を見つめると「人の顔見る者（モン）、飯粒（マヽ）・小つぼ」と言ふ。名前をよみ込む文句では古いのは、

信（ノブ）こ。のったらのん十郎（ジユウラウ）。のらのっちんぺえら（ぼいらとも）。

勝こ。かったらかん十郎。からかっちんぺえら。

幾分新しいのでは、

寅こ。とっと言へ。とりき、とゝりき、とやまのとんのくそ。
清(キヨ)こ。きっと言へ。きりき、きゝりき、きやまのきんのくそ。
など名がしらの音を、頭韻（ありたれいしよん）に挿んで、誰にでも当てはめる。又、
せいやん雪隠(センチ)で、ばゝ（糞）こ（泌）いて、まっちゃん松葉で掻きよせて、たぁやんたんご（たご――角桶）で汲みに来て、みいちゃん見に来て臭かった。
清造とか、松太郎とか、辰三・簑吉とか、名がしらの、此歌の中にあるものが一人でもあると、謡うて悔しがらせる。何でもない事の様で、讒訴に堪へられぬ憤懣を感じたものである。男の子と女の子とが遊んでゐると、
男とをなごとあすばんもん（物）。一間(イッケン)まなかに（の？）疵がつく。
又「男とをなごときっきっき」。痛いと叫ぶと「いたけりや、鼬の糞つけい」と言ふ。

一五　らつぱを羨む子ども

十年程此方(このかた)、時々、子どもの謡ふのを聞く。軍人や、洋服を着た学生を見ると「へえたいさん。ちんぽと喇叭と替へてんか」と言ふ。二十年前に子どもであつた私らの知らぬ、軍人羨望或は崇拝である。大正二年、阿蘇山を越して、豊後の竹田辺でも、此歌を旅姿の我々に、女の子の謡ひかけたのを聞いた。勿論、女の子の物をよみ入れてゐた。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集　3」中央公論社
　　1995（平成7）年4月10日初版発行
底本の親本：「『古代研究』第一部　民俗学篇第二」大岡山書店
　　1930（昭和5）年6月20日
初出：「郷土研究　第二巻第一号」
　　1914（大正3）年3月
　　「郷土研究　第四巻第七号」
　　1916（大正5）年10月
　　「土俗と伝説　第一巻第一号」
　　1918（大正7）年8月
　　「土俗と伝説　第一巻第三号」
　　1918（大正7）年10月
※底本の題名の下に書かれている「大正三年三月・五年十月「郷土研究」第二巻第一号・第四巻第七号。大正七年八・十月「土俗と伝説」第一巻第一・三号」はファイル末の「初出」欄に移しました。

入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2007年4月8日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三郷巷談

折口信夫

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/